

そのときに戻りたい

主幹教諭 中村 昌子

2月18日(土)・20日(月)の2日間にわたって行われたおわかれ音楽会。保護者の皆様には、多数ご参加いただきましてありがとうございました。たくさんの拍手、笑顔、そして涙にあふれる素晴らしい2日間となりました。保護者の皆様からもたくさんのアンケートをお寄せいただき、皆様の感動のお気持ちがたくさん伝わってきました。教員一同読ませていただき、本校の教育活動へのご理解に感謝申し上げます。また、運営に関しても参考になるご意見をいただき、来年度以降に生かして参りたいと思います。

いつも感動をたくさんもらう音楽会なのですが、それと同時にいつも思うのは自分が6年生を担任したときに子どもたちと作り上げたオペレッタの事です。変な話と思われるかもしれないのですが、私は必ずと言っていいほど、オペレッタを見た日は、家に帰って自分が担任した6年生のオペレッタを見ます。なぜか、無性に見たくなるのです。それはなんでなのだろうとよく考えます。実際見てみると、子どもの進化とは素晴らしいもので、演じる姿や、歌声、ダンス、比べものにならないほど今の子どもたちの方が格段上であることも実感するのです。しかし、単に比較するために見るのではないのです。演じ終えたときのあの瞬間、苦労して作り上げたあの日々のことを思いだし、感傷に浸るのです。そのときに戻りたくなるのです。

私が6年生を担任した子どもたちが演じていた頃は120名を超える児童数でしたので、Aキャスト、Bキャストのダブルキャストでした。どちらが児童鑑賞日になるか、キャストの子どもたちにとっては大変な問題でした。みんな児童鑑賞日に在校生の前で、とりわけ1年生の前で演じたいからです。互いに競わせているわけではありませんが、子どもたちはやはりよりよいものを作りたいと演出の子どもを中心に必死に練習をします。そして、音楽会の前日に両方が最終リハーサルをして、それぞれの演じる日が決まるのです。担任や音楽の先生、そして子どもたち全員の意見で決めます。キャストの子どもたちは勿論自分たちが児童鑑賞日に演じたいの言うまでもないのですが、そこはしっかりとお互いの演技を見た上で、「Aキャストの方が小さい子にわかりやすい演出が光ってる」とか、「Bキャストの方が大人受けする演出が多い」とか冷静に意見を出す子も出てきます。そして、みんなで納得して、出演日が決まります。中には悔しくて涙する子もいました。それでも互いのよさを認め合い、自分が出演する日に向けての最後の仕上げをします。保護者鑑賞日に決まった子たちは、たった1日の間に更に大人受けするウイットに富んだ台詞を加えるなどその対応力は見事なものでした。そして、保護者鑑賞日には見事に演じきり、児童鑑賞日には合唱隊としてしっかりと舞台のキャストを支えていました。本当は児童鑑賞日に演じたいのだけれど、気持ちを切り替え、モチベーションを上げている子どもたちの姿に感動し、涙したことを覚えています。

下級生への思いと、仲間への思い、それぞれを一人一人の6年生が心の中で葛藤し、醸成させ本番を迎えているのです。そんな伝統が受け継がれていく大泉のオペレッタをどうぞ毎年楽しみにご覧下さい。

先日25日に、初めて6年生を担任した子ども(今はアラフォーのりっぱな大人ですが)の同期会がありました。当然のことながらVHSの古いビデオをひっぱりだし、みんなでオペレッタを鑑賞しました。タイトルは「未来の国のマリー」。ロボットが人間と共存する時代が到来し、つらい仕事ばかりさせられるロボットが反乱を起こすお話です。今から26年前、近未来を予測したすごいストーリーでしょ!と自慢させてください。